

教育実践報告：
「南ドイツ研修」—言語と文化の学習—

小坂 光一

0. 序

「南ドイツ研修」は、学生がドイツ語の授業で勉強したことを現地でさらに発展させ、実際にドイツ語を使ってみること、ドイツ文化に直に触れることを目的として1989年夏から隔年で行われてきた。今回(2007年夏)が第10回目であり、最終回となった。¹ 準備段階(1987年夏)から数えれば20年間にわたる。ここで、この研修の意義を再確認するとともに、全10回のまとめを行いたいと思う。

1. 準備段階

同種の研修は、筆者の前任校である九州大学を中心に、九州地区ですで行われており、筆者自身も、名古屋地区において実践したいと考えていた。そして、1989年に、当時外国人教師として名古屋大学に勤務していた Konrad von Heuduck 氏、schwäbische Bauernschule Bad Waldsee(以下、「バウエルンシューレ」と記述する)² に勤務する Brigittte Doldi 氏及び筆者の三者による協働作業により第1回目が実現した。

実現までの経過は以下の通りである。すなわち、筆者は、1986年4月から1987年9月まで、ドイツ連邦共和国 Alexander von Humboldt-Stiftung の研究員として、Konstanz 大学の Fachgruppe Sprachwissenschaft(言語学群)で研究生を送っていたのであるが、それが終わりに近づいた1987年夏に von Heuduck 氏が Bad Waldsee に帰省したときに

¹ 最終回となる理由は、企画者である筆者が2009年3月をもって名古屋大学を定年退職する予定であることにある。

² Badenwürttemberg 州 Bad Waldsee にある州立研修所の名前。

小坂光一

企画が具体化した。彼が具体的な研修場所を求めて友人に相談した結果、パウエルン・シューレが浮上し、そこに勤務する Doldi 氏と話し合った結果、そこが研修場所として確定した。

プログラムの具体的な内容については後に述べるが、おおまかに言うと、研修は前半約2週間の合宿形式の研修と後半約2週間の自由研修からなる。前半の合宿形式の研修では、午前中はドイツ人によるドイツ語授業、午後(夕方以降を含む)はいろいろな施設などの視察やドイツ人家庭との交流が中心である。なお、前半2週間の間に3~4回程度、全日にわたる日帰り旅行を計画し、比較的遠方にも出かけた。後半の自由研修は参加者のグループ行動あるいは単独行動であり、各自思い思いの場所に出かける。

2. 参加者・期間の推移

全10回の参加者数・期間の推移は以下の通りである。

第1回目	1989年夏(7月8日—8月7日)	参加者26名
第2回目	1991年夏(7月12日—8月12日)	参加者33名
第3回目	1993年夏(7月8日—8月9日)	参加者30名 ³
第4回目	1995年夏(7月22日—8月21日)	参加者24名
第5回目	1997年夏(7月19日—8月18日)	参加者16名 ⁴
第6回目	1999年夏(7月24日—8月25日)	参加者19名 ⁵
第7回目	2001年夏(8月3日—9月4日)	参加者20名 ⁶
第8回目	2003年夏(8月1日—8月29日)	参加者14名 ⁷
第9回目	2005年夏(8月6日—9月2日)	参加者15名 ⁸
第10回目	2007年夏(8月9日—9月5日)	参加者24名 ⁹

³ 筆者の父の死亡により、筆者はこの回は同行できず、当時名古屋大学教授(現在名古屋大学名誉教授)小栗友一氏に同行をお願いした。

⁴ 2度目の参加者1名(社会人)を含む。

⁵ 他大学の学生4名を含む。

⁶ 他大学の学生3名を含む。

⁷ 2度目の参加者1名、他大学の学生1名を含む。

⁸ 2度目の参加者1名、他大学の学生2名、社会人1名を含む。

⁹ 2度目の参加者2名、3度目の参加者2名を含む。また、全24名の中に、部分参加者が5名いる。全24名の内訳は、名古屋大学の学生10名、他大学(愛知教育大学)の学生4名、社会人10名である。

実施のためには共通費用(人件費、貸し切りバス代など)が必要であるが、個人負担の許容度を考えると20人以上の参加者がいることが望まれる。第7回目までは、(第5回目を除き)参加者確保が比較的容易であった。特に第2回目(1991年夏)は参加希望者が約50名いて、抽選や語学能力試験などにより選抜する必要すらあった。しかし、第8回目以降は人員確保がむずかしくなった。その理由として主に次の5つが考えられる。そのうち、決定的な理由は①、②、③であろう。すなわち、費用の負担が増えたことである。

- ① 上述の研修期間の推移からもわかるように、大学の夏期休暇の開始が遅くなった。このことにより、研修期間が航空運賃の最も高い時期と重なってしまい、参加者が負担する費用が増えた。第7回目もすでにこの時期と重なっていたが、ドイツの通貨がまだMarkであり、次の②が当てはまらなかったこと、および極端な円高の時期であったため、費用の負担は許容範囲内であった。
- ② 通貨がEuroに変わったことにともない、ヨーロッパ各地ではなほだしい便乗値上げが行われた。特に、ホテルやレストランにおいてこの傾向がはなほだしい。この点でも、参加者の負担が増えた。
- ③ 日本円が弱くなり、Euroが極端に強くなった。
- ④ ドイツ語の学習人口が減った。
- ⑤ 授業クラスの少人数化により、授業形態は理想に近づいたが、「人集め効果」という観点から言えばマイナスになった。

第10回目(2007年夏)の参加者は24名であり、比較的多いように見えるが、名古屋大学の学生に限定すれば10名に過ぎない。そこで、愛知教育大学の先生(大野寿子氏)に協力をお願いした結果、4名を確保することができた。また、この回が最終回であることから、社会人(特に既参加者)の参加が多く、結果的には理想に近い数字となった。

夏休みの開始が遅くなったことにより、費用以外の別の問題も生じた。研修時期が(ドイツの)他の団体の研修と(部分的に)重なってしまい、バウエルンシュレー(研修場所として)まるまる2週間確保することがむずかしくなった。そこで、第6回目以降(第7回目を除く)は次のような手段を講じた。

第6回目(1999年): 第1週目はバウエルンシュレー、第2週目はホテル「Paradies」と民宿「Waggershauser」に分散して宿泊。最後の「お別れパーティ」は「Waggershauser」にて行った。

小坂光一

第8回目(2003年): 第1週目は Bildungshaus der Franziskanerinnen von Kloster Reute (以下、「ロイテ修道院研修所」と表示する)、第2週目はパウエルンシュレーを使用。「お別れパーティ」はパウエルンシュレーで行った。

第9回目(2005年): 第1週目はパウエルンシュレー、第2週目はロイテ修道院研修所。「お別れパーティ」はロイテ修道院研修所で行った。

第10回目(2007年): 第1週目はロイテ修道院研修所、第2週目はパウエルンシュレー。「お別れパーティ」はパウエルンシュレーで行った。

3. 効果と問題点

この研修には次のような効果がある。

- ① 実施前及び実施後におけるドイツ語学習意欲が上昇する。
- ② 参加者の満足度はきわめて高く、人生観すらも変わるようである。この研修に2度、3度参加した者がいることがこれを証明している。
- ③ 後に短期・長期にわたり渡独するきっかけとなる。筆者が把握している限りでは、研修後に再度渡独してドイツの語学学校でドイツ語を勉強した者が2名、ドイツやオーストリアの大学に(長期)留学した者が3名いる。ドイツで就職した者も2名いる。

前半の合宿の間はドイツ人講師のもとでのドイツ語授業とドイツ文化を知るための視察や観光が行われるが、1日3食「同じ釜の飯」ならぬ「同じかごのパン」を食べながらの合宿は実に和気あいあいとした雰囲気の中で行われ、教師と学生の理想的な関係が築かれる。

後半の2週間は各自が自由に各地に散らばるので、教師としてはいささか不安も感じるが、そこは心を鬼にして送り出す。電話番号を渡し、困ったら電話するようにとくどく言うてあっても、電話がかかってくることはほとんどなかった。学生たちは、ドイツ語が不自由ながらも、みごとに自力で困難を乗り越える。この行動力と知力には教師である筆者も兜を脱ぐ。そして、帰国の途につく日の前日の再集合は実に感動的で、学生たちの体験談やほら話を聞きながら、「教師冥利に尽きる」という表現を実感する。筆者にとって彼(女)たちの多くは、在学期間中のみ存在する「通過集団」ではなく、卒業後も関係が続く「生涯の学生」となる。参加して後悔した学生は絶対いないはずだ。これは自信を

持って言える。

問題点はただ1つ、それはこの研修に参加しようと思っていた学生が(家庭の事情や経済的理由などの)何らかの事情で参加できなくなったときに発生する。この場合は上述した効果①の逆の現象が生じる。すなわち、それまでは授業中に目を輝かせてドイツ語を練習していた学生が居眠りをするようになる。目標を失うということは恐ろしいことである。

ここで一言しておきたい。この研修は他からの費用援助を申請することをせず、また大学の制度と関連付けることもせず、全くの個人的企画として行ってきた。その理由は、この研修を純粋に「ドイツ語とドイツ文化の学習」として位置づけたかったからである。例えば、この研修に参加することによりドイツ語の単位が取得できるとなれば、参加者は増えるであろう。しかし、「単位取得・単位補充」(という利益)のために参加した学生を相手とした研修は純粋な意味での「ドイツ語とドイツ文化の研修」にはならない。何の束縛も受けず、完全に企画者の意志通りに実施したかった。さらに、外部資金を得たり、大学の単位制度と結びつけることにより生じる可能性のある次のような事態も避けたかった。

- ①ドイツ人講師の履歴、教授能力の事前審査、及びそれらの会議体での承認(非常勤講師任用の手続き)
- ②目標設定、綿密なプログラムの作成、及び研修効果の証明(単位換算など)
- ③会計報告とその承認
- ④年度計画として生じる「実施義務」の発生

4. 具体的プログラム

10回分の具体的なプログラムには多少の変化があるものの、かなりの部分が共通している。ここでは最新のもの(第10回目、2007年夏)を提示する。

8月9日(木)

中部国際空港出発、Zürich 空港到着。その後、貸し切りバスでロイテ修道院研修所に移動。

8月10日(金)

午前: Oberschwaben 地方に関するレクチャー、ドイツ語授業(1)

小坂光一

午後: Bad Waldsee の街の Orientierung

8月11日(土)

全日旅行(ボーデン湖の東側地域):Friedrichshafen のツェッペリン博物館見学、ノ
ーベル賞受賞者会議が行われる Lindau 散策

8月12日(日)

午前: 教会(自由行動としての礼拝)、ドイツ語授業(2)
午後: Bad Wurzach の自然保護区域の視察

8月13日(月)

午前: ドイツ語授業(3)
午後: Bad Waldsee の温泉療養施設の視察。所長 Peter Blank 氏の講演

8月14日(火)

全日旅行(Stuttgart):Mercedes-Benz 新博物館と Ludwigsburg 城の見学(日本人ガ
イド付き)、その後自由行動

8月15日(水)

午前: ドイツ語授業(4)
午後: Weingarten の教会見学、教会にある大オルガンの内部見学(教会オルガン奏
者 de Beur 氏の案内による。通常は立ち入り禁止の場所)
晩: Wagershauser 家からの招待による懇親(すべて手作り料理)

8月16日(木)

午前: ドイツ語授業(5)
午後: Waldburg 城の見物、中世の町 Wangen の視察

8月17日(金)

午前: ドイツ語授業(6)
午後: ドイツ語授業(7)。引き続き、バウエルンシュレーへ移動。その後自由行動

8月18日(土)

全日旅行(ボーデン湖の西側地域):Birnau 教会、中世の町 Meersburg、花の島
Mainau 島、Schaffhausen の Rheinfall(「ラインの滝」)

8月19日(日)

午前: 教会(自由行動としての礼拝)、Frühschoppen コンサート
午後: ドイツ語授業(8)(オペラ「Tosca」の内容説明)、その後自由行動
晩: Bregenz 湖上オペラ「Tosca」鑑賞

8月20日(月)

午前: ドイツ語授業(9)
午後: 教会見学、ビールジョッキ博物館の訪問
晩: 温泉入浴(自由行動)

8月21日(火)

全日旅行: Neuschwanstein 城、Wies 教会訪問。さらに、Oberammergau での自由行動を経て Linderhof 城を訪問

8月22日(水)

午前: Bad Waldsee 町長からの招待、庁舎訪問。その後自由行動
午後: 2グループに分かれて、ケーキ作りの実習(講師: Manuela Schmied さん)
晩: Huber 家からの招待による懇親

8月23日(木)

午前: ドイツ語授業(10)
午後: Ulm 市の視察(日本人ガイド付き)

8月24日(金)

午前: ドイツ語授業(11)
午後: 研修の総括。帰国または自由研修の準備。パーティの準備。自由行動
晩: お別れパーティ

8月25日(土)

午前: (一時的)解散(帰国、あるいは自由研修開始)

9月3日(月)

午後: Freiburg 集合
晩: 最後の晚餐

小坂光一

9月4日(火)

午前：自由行動

午後：Zürich へ移動

晩：Zürich 空港にて搭乗

9月5日(水)

晩：中部国際空港到着、解散

5. 最後に

全10回という数字は切りのいい数字である。筆者はこの研修を10回行いたいと常に思っていた。そして、在職年数を計算する限りそれは理論的に可能であった。しかし、年々仕事量が増えていくことを考えると、夏期休暇中のまる1ヶ月間をこの研修に当てることは不可能であるようにも思われた。第7回目以降はその都度、これが最後かもしれないと思いつつ、気を入れて回を重ねてきた。この研修の良さは実際に参加した人にしか実感できないとは思いますが、参加者が満足してくれればそれでいい。希望通り第10回目を終えた今、まさに感無量である。1度たりとも欠かすことなく、また予定を変更することもなく、全くの計画通りに隔年で18年間実行できたことは奇跡に近いようにすら思われる。

利害関係を全く度外視して献身的に協力してくれたドイツ側スタッフ、毎回欠かさずことなく参加者全員を招待して下さったドイツの家庭、隔年で1ヶ月間の不在を大目に見てくれた名古屋大学の部局スタッフ、毎回満足感を表明してくれた参加者の方々に心からお礼を申し上げたいと思う。

参考資料

- ドイツゼミ(1989):『南ドイツ/オーストリア研修旅行』¹⁰
- ドイツゼミ(1991):『南ドイツ研修旅行 2』
- ドイツゼミ(1993):『南ドイツ研修旅行 3』
- ドイツゼミ(1995):『南ドイツ研修旅行 4』
- ドイツゼミ(1997):『南ドイツ研修旅行 5』
- ドイツゼミ(1999):『南ドイツ研修旅行 6』
- ドイツゼミ(2001):『南ドイツ研修旅行 7』
- 小坂光一(2001):「学生のドイツ研修」、『月刊言語』Vol. 30、No. 13(2001年12月号、大修館書店)(S. 4-5)
- ドイツゼミ(2003):『南ドイツ研修旅行 8』
- ドイツゼミ(2005):『南ドイツ研修旅行 9』
- 小坂光一(2006):「第9回目を終えた『南ドイツ研修』」、『名大トピックス』No. 156 (S. 16-17)
- ドイツゼミ(2007):『南ドイツ研修旅行 10』

¹⁰第1回目(1989年)は2週間の合宿の後、さらに1週間、オーストリアのウィーンまで団体行動をとった。それ故に、報告書のタイトルもこのようになっている。このときの自由研修は1週間のみだった。しかし、参加者の興味がまちまちであったため、第2回目からは第3週目と第4週目を自由研修とした。

